

聖書：ピリピ人への手紙3章1～16節

説教題：今あるところから

ふだんいろいろなことで思い煩い、怒ったり悲しんだり、気分の浮き沈みで右往左往するよりも、心から喜びながら毎日を過ごすことができるならどんなに楽だろうと考えます。1節に「私の兄弟たち。主にあつて喜びなさい」とあり、同じ表現が2章18節にもあります。喜びなさいと言われて、すぐに喜ぶことができるのなら苦労しません。パウロはどんな意味を込めて「喜びなさい」と書いたのか。今日はそこに目を留めていきます。

1 地上の望み

子ども時代をふり返るとあの頃は単純なことで喜んでいました。「今日はカレーだ。」「あした親戚が泊まりに来るよ。」おいしいものを食べることができる。久しぶりにいとこたちと会っていっしょに遊べる。そう考えただけでうれしくなりました。

しかし大人になると、そんな単純なことでは済まなくなります。パウロが、「人間的なものにおいて頼むところ」と言っているものがなければ喜ぶことができないと考えるようになります。「人間的なものにおいて頼むところ」とは何か。地上で手に入れられるもの。地上の望みと言ってもよいでしょう。

パウロもかつてそんな生活を追い求めていたと、5、6節で語っています。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法においてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義に

ついてならば非難されるところのない者です。」

パウロは、ピリピの教会に宛てて手紙を書いていきます。イスラエルから見ればピリピは外国です。そのピリピ教会の中に、聖書の話聞き大人になってから肉体に割礼を受け、そのことを教会で自慢する人たちがいました。パウロはそんな人たちに対してこう言いたいのです。

あなたは大人になってから割礼を受けたと言っているが、私は生まれて八日目に受けました。あなたはピリピ人ですが、私はイスラエル民族の生まれ。それも外国で生まれ育った者たちとは違う。イスラエルで生まれイスラエルで育った、純粹のヘブル人である。それもただのヘブル人ではない。律法においてはパリサイ派に属し、グループの中で人一倍熱心に学び、活動し、神の教会を迫害し滅ぼさなければならぬと心から固く信じていた。そういう者である。

パウロは、小さなときから家庭教師がつき英才教育を受けたようです。青年時代は当時イスラエルの中でもっとも有名な先生のもとで律法について徹底的に学んでいました。そんなことは普通家庭ではできません。由緒正しい家系、それも相当な財産がなければできません。つまり拔群の家柄、裕福な家庭に生まれ育ち、名門の大学に入りエリート教育を受け、出世街道まっしぐら。頭は切れるし、行動力もだれにも負けない。将来はパリサイ派有力な指導者になるだろうとだれもが思っていた人です。多くの人たちが欲しい

欲しいと願っているものを、すべて手にしていた。それがパウロでした。

2 天の望み

1) キリスト・イエスを知っている

そのパウロが、今こう言うのです。8 節。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくただと思っています。」

日本語聖書で、「私はキリストのためにすべてのものを捨てて」とある箇所は、原文の即して訳し直すと、「私はキリストのゆえに大きな損害を被ってしまいました」となります。もちろん本気で言っているのではなく、キリストを知ってしまったがために、今まで大切だと思っていたこの世の望みのことなどまったくどうでもよくなった。そう言いたいのです。

同じことを、田舎に生まれ、家柄もなければ財産もない私が言っても単なる負け惜しみにしか聞こえません。しかし、パウロが言うと言得力が違います。何がそこまでパウロを変えたのでしょうか。

2) 義を持つことができる望み

この世のすべてのものを捨てても惜しいとは思わない。それほどすばらしいことが神のうちにあるから。いったいそれはなんでしょう。9 節に書かれています。「キリストの中にあるものと認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」

すでに手に入れたものではありません。やがて神から義とされる。そのことに望みを置いて歩んでいますと語っています。

考えてみると不思議です。実際に契約書のようなものがあって、期日までにきちんとこのことを実行しますというような証拠があるわけではありません。ただ、信じて望みを置いているだけ。世の人たちから見たなら、私たちはこの世で最も愚かな集まりに見えるでしょう。

3) キリストの苦しみにあずかることを知る

それだけではありません。パウロはこんなことまで語っています。10, 11 節。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうかして死者の中からの復活に達したいのです。」

死者の中からの復活に達する。それはよいでしょう。わからないのは、キリストの苦しみにあずかることも知らなければならないと語っているところです。

私たちは常日頃から多くのことを神に願います。今こういう問題があるのでなんとか解決してください。あのことが不安なので悪い方向にいかないようにしてください。苦しみを取りのけてください、と祈りはしますが、苦しみを与えてください、と祈る人はまずいないでしょう。

なぜパウロは、キリストの苦しみにあずかるべきだと考えるのでしょうか。これこそ愚か者の極みです。そんな人が、どうして「主にあって喜びなさい」と言えるのか、つながりが見えません。

3 神の栄冠を得るために

1) 一心に走っている

この手紙を書いているときのパウロの境遇が関係しています。パウロは裁判を受けるために囚人としてローマに送られてきています。裁判の行方次第では死刑になることだってありえます。そんな中で毎日を過ごしているのですから、どうしても自分のいのちのことを考えないわけにはいきません。

私たちは、死刑の宣告を受けることはまずないでしょう。しかし、ある日突然、医者から「あなたのいのちはあと数ヶ月です」と告げられることはあり得ます。そんなときだれでも思います。自分がいままでやって来たこと。この世の業績や名誉。地位や財産。収入。そんなものは何の役にも立たない。自分のいのちを救うことができない。それがわかったとき、急に自分が世界でひとりぼっちになった不安に突き落とされます。

パウロも同じでした。「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

まるで朝から夜遅くまでがんばって働くサラリーマンの姿を思い浮かべますが、そうではありません。うしろのものとは、人間的に寄り頼むものと言い換えることができます。人間が生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされたとき、地位のお金も名誉もすばらしい業績も一つとし自分を救うことができない。では何が自分を救うことになるのか。うしろのものではない。前に置かれているもの。神の栄冠です。言い換えれば、死者の中からの復活です。神の義です。それだけが自分を救うことができる。パウロはそこに目を留めています。

しかし、そのために通らなければならないところをがひとつあります。10節、「キリストの苦しみにあずかることも知って」。まず苦しみをとおらなければならぬ。そこを通過して、その先に復活があり、神の栄冠がある。そういう順番を見えています。

2) すでに達しているところから

パウロは「喜ばなさい。」と言っています。苦しみを忘れなさいという意味ではありません。苦しみから目をそらしなさいという意味でもありません。むしろ反対です。苦しみに目を留め続けなさい。その先に喜びがあると言っています。私たちは、苦しみと喜びは水と油のようなものと考えています。なので、どうしてこんなことが言えるのか、不思議に思うかもしれません。

パウロはキリスト・イエスを知っていると述べています。キリストの何を知ったのでしょうか。そこが問題です。死ぬか生きるかの瀬戸際に立たされ、苦しみに向き合ったとき初めてわかりました。それまでは、主が私のためにどこまで苦しみを受けられたのか、ぴんときいていません。でも、今自分がいつ死ぬかわからないというところに立たされて、初めて主が苦しみの道を歩まれたことの意味、十字架に向かわれた重さと恵みが心の奥深いところですしりと味わうことができるようになりました。主がくださる喜びは、主ご自身が苦しまれた歩みを通して注がれてくる。そこに気がつきました。

キリストにある喜びを味わいたいとだれでも願うでしょう。でも、そのためには、まず苦しみに向き合うようにと言われていきます。私にはできない思われたでしょうか。安心してください。16節。「私たちはすでに達

しているところを基準として、進むべきです。」ほかの人を見てあの人より前だとか後ろだとか、順番を気にする必要はない。今あるところからスタートすればよい。なぜなら、主がすでに私たちを捕らえてくださっているからです。主がともにおられるのに、どうしてあせるのですか。どうして悲しむのですか。今日、今あるところからそれぞれの歩幅で歩き出せばそれでよい。目指すところはうしろではありません。ひたむきに前に置かれているものに向かって進みます。神がくださる喜びに目を留めていきます。